

薩摩塔研究(続)―その現状と問題点

高津孝・橋口亘・大木公彦

高津孝、橋口亘、大木公彦は、高津孝・橋口亘2008の発表以降、石材論、中国系石塔という観点から薩摩塔研究を進め、大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009、高津孝・橋口亘・大木公彦2010、大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘・内村公大2010、橋口亘・高津孝・大木公彦2011と研究成果を公表してきた。また、関連する礎石の石材研究として高津孝・橋口亘・松本信光・大木公彦2010がある。この間、大石一久氏、井形進氏らによって新たな薩摩塔の発見や重要な研究成果の公表が続き、薩摩塔研究は大きく進展した。本稿は、薩摩塔を総合的に論じた高津孝・橋口亘・大木公彦2010を受けて、その後の研究成果を報告するものである。

1 北部九州薩摩塔調査

2011年7月2日、3日に、北部九州地区の未調査7地点の石造物について石材調査を行った。最初に訪れたのは、大石一久氏から情報提供を受けた下寺観音堂跡（平戸市田平町下寺免）である。地元の方の話では、元々観音堂があったが、台風で壊れたので撤去したとのことである。背面の大きな石は、玄武岩で、その前に石塔が並んでいる（写真1）。肉眼観察によって、写真1の石塔部材Bと石塔部材Cが、梅園石と認定可能な石材であると判明した。石塔部材Aは花崗岩である。

井形進2010に紹介された福岡市東区の志賀島火災塚の薩摩塔は、肉眼観察により、梅園石と認定可能な石材であると判明した。神戸女子大学の山内晋次氏からの情報で訪れた興徳寺（福岡市西区姪の浜）の大応国師供養塔（開山大応国師御塔）は、塔の蝶足部分の部材と請花部分の部材のみ梅園石と認定可能な石材であると判明した。また、興徳寺門前左に残る相輪の可能性のある部材、池の近くに残る四天王像彫出部材が、ともに梅園石と認定可能な石材であると判明した。大応国師供養塔については、詳しくは橋口亘・高津孝・大木公彦2011を参照されたい。

井形進2010に紹介された茶山会館（福岡市城南区茶山）の將軍地藏は、氏子代表の久保秀輝氏のご協力により、調査が可能になった。これは、薩摩塔が將軍地藏として祀られているものである。肉眼観察によって、梅園石と認定可能な石材であると判明した。

福岡市博多区吉塚の曹洞宗大宝山明光寺墓地には、石塔の屋根部分を裏返して手水鉢に使用された石塔残部が存在する¹。肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。

井形進2008bに言及された馬頭観音堂（福岡市博多区堅粕）の手水鉢及び基部（写真2）は²、肉眼観察の結果、ともに梅園石と認定可能な石材であると判明した。

松尾尚哉2010に紹介された福岡県糟屋郡宇美町の個人宅に保存されている薩摩塔は、所蔵者

のご厚意により調査することができた。肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。これは、天本孝志1977に「宝篋印塔」として紹介されたものである。なお、調査にあたっては、岡部康文氏の協力を得た。

また、11月23日、24日に、北部九州地区の未調査6地点の石造物について石材調査を行った。平戸市では、誓願寺の薩摩塔³を調査し、肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。次に、平戸市鏡川町の松浦史料博物館入口を右に入った庚申講のお堂前の薩摩塔⁴（写真4）も、肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。また、前回の調査で見いだせなかった宮ノ浦沖の宮の類薩摩塔の共伴遺物である宋風獅子⁵（写真5）も、今回、肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。吉野ヶ里町文化財資料室に保管された霊仙寺跡出土薩摩塔2基⁶も、肉眼観察の結果、赤味を帯びてはいないが梅園石と認定可能な石材であると判明した。西野元勝氏の案内で、神崎市仁比山護国寺地蔵院の薩摩塔⁷を調査し、肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。九州歴史資料館では、井形進氏の案内で、寄託されている太宰府薩摩塔を調査することができた。肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。

仁比山地蔵院薩摩塔と太宰府薩摩塔には、均質な石材に特徴的な球状風化が見られる。また、宮ノ浦沖の宮の宋風獅子は、クラックに熱水が入り結晶化した脈（vein）が存在し、右上から左下に全体を斜めに横切る白い割れ目となっており、顔の右下部分はこの脈に沿って剥落している。石造物制作にこのような石材を使用することは異例であり、良質の石材が入手できなかった可能性を示唆する。

2 年代

石造物の年代比定は、紀年銘でも存在しない限りたいへん困難である。薩摩塔の年代比定もこうした問題を抱えてきた。高津孝・橋口亘2008によれば、薩摩塔に関しては、坊津薩摩塔が齋藤彦松によって発見、命名された昭和30年代から、その石材を日本国内ではなく、琉球や中国に求める説が提唱され、その成立を鎌倉中後期から室町時代にかけて、あるいは室町時代とする説が提出されてきた。

多田隈豊秋1975では、長崎県の志々伎神社沖の宮塔が、鹿児島県に5基存在する薩摩塔と類似することを指摘するが、沖の宮塔の石材を安山岩とし、日本の石造物発展史の中に位置づけ、中台の蓮弁を根拠として、その成立を鎌倉末期と推定している。また、多田隈豊秋1978では、坊津薩摩塔を「変形仏塔」と認定し、石材を「南薩地方でよく塔材に用いられている山川石と称せらるる凝灰岩らしい」とする。さらに、「製作年代の想定は甚だ困難」とするも、中台の勾欄文様の表現から南北朝中期ぐらいとする。また、水元神社薩摩塔を坊津薩摩塔と「同一工人」の作とし、同じく石材を「凝灰岩（山川石）」とし、年代を南北朝とする。鹿児島県の薩

摩塔の残り3基についても、下里三重石塔〔傳虎御前供養塔〕の条で言及するが、石材、年代については記述がない。

重要な展開は大石一久1998によるものである。大石一久1998は、薩摩塔が長崎県に7基、佐賀県に1基存在することを新たに紹介し、九州西部に広く分布する石塔であることを示した。また、沖の宮塔を含め、それらの石材を凝灰岩とし、山川石（凝灰岩）説を退けた。さらに、沖の宮塔を含め、薩摩塔には編年基準塔が存在しないことから、製作年代の断定は危険であるが、一応の目安として、沖の宮塔については、鎌倉時代末ごろとし、他の薩摩塔については多田隈豊秋1978の南北朝説よりも下る可能性を示す。また、大石一久1999では、「蝶足部分の意匠などから考えると、日本本土よりもむしろ中国大陸方面で製作された可能性もあり」とする。

松田朝由2008では、四天王像の表現など薩摩塔の造形の検討を行い、中国大陸から搬入された可能性をあらためて指摘し、薩摩塔の笠部分の軒裏や軒反りなどについて国内他資料と比較検討した結果、薩摩塔の製作年代を古代から鎌倉時代と推測している。

年代についてのさらに重要な指摘は、井形進2008bによってなされた。井形進2008bは、福岡県久山町の首羅山遺跡に存在する薩摩塔2基および共伴遺物としての宋風獅子1対を紹介し、日本に残存する宋風獅子10点との様式的検討から、首羅山遺跡の宋風獅子を13世紀半ばと推定する。ただし、年代をはかる物差しとしての使用は慎重であるべきとする。また、宋風獅子が薩摩塔と同一工房で制作されたとする。さらに、首羅山遺跡について、「十三世紀の半ば頃、宋代の文化や宋風文物の移入が頂点に達しており、そのような状況の中で造形に関わる活動が、活発に行われるような環境が、形成されていた様子を窺うことができる」とし、「首羅山遺跡の薩摩塔については、十三世紀の中国、南宋時代の制作」としている。

大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009は、坊津薩摩塔の石材と中国寧波郊外の白亜紀方岩組地層に由来する凝灰岩（梅園石）について岩石学的分析を行い、両者の岩石が同質であることを報告した。さらに高津孝・橋口亘・大木公彦2010は、沖の宮塔を含め19基の薩摩塔類について肉眼観察を行い、そのすべてが白亜紀方岩組地層に由来する凝灰岩（梅園石）と認定可能であることを示した。さらに、建久7年（1196）、東大寺再建に伴って、中国産石材が輸入され、「中門石獅々、堂内石脇士、同四天王」が作成されたこと⁸、一部部材が薩摩塔と同じ浙江産石材と判明した宗像大社「阿弥陀経石」が、承久二年（1220）以前に南宋から日本にもたらされたものであることを考慮し、12、13世紀を中心として製作年代を検討すべきとした。

薩摩塔については、紀年銘資料の発見が待望されていた。井形進2010では、長崎県平戸市志々伎神社中宮の薩摩塔の1基に陰刻銘が存在することを述べているが、銘文は報告されていなかった。井形進2011において、はじめて銘文の拓本が掲載され、その判読結果が示された。判読に因れば、「元□三□□八月□」との紀年があるとされ、日本年号「元亨三年」（1323）との推定が示されている⁹。

2010年4月20日、寧波で発刊される中国地方紙の一つ「東南商報」に「江南兵馬俑」戸口査到了」（「江南兵馬俑」の出生地発見される）という記事が掲載された¹⁰。「江南兵馬俑」とは、寧波郊外の東錢湖周辺の宋代墓に付随する墓前石刻を指す。これら東錢湖石刻群は、2001年6月に國務院によって第五回全国重点文物保護單位に指定され、南宋時代の石刻と考えられてきたが、今回の発見によって北宋晩期に遡る可能性のあることが判明したとする¹¹。発見とは、鄞江鎮光溪村毛家自然村付近の採石場で3つの半成品石刻（石虎、亀趺、文臣）が発見された事を指す。記事によれば、「毛家村一帯の周囲半径2キロの範囲内に在るものを鄞江小溪石と言う。現在の光溪はもともと小溪と言っていた。北に向かって4キロを鄞江梅園石と言ひ、この二大石材は寧波の發展にとって建築材料と石刻作成の基礎を提供した」とする。東錢湖石刻群には、地元石材として主として梅園石、小溪石が使用されてきたとされ、これらはともに寧波西部に露出する方岩組地層に産する。方岩組地層の露出地域は広く、具体的にどこから採石された石材を使用したかが不明であった。今回、東錢湖石刻群と共通する半成品石刻が発見されたことで、具体的な採石地が判明したのである。

発見された3つの半成品石刻の年代については、明代以降、墓前の武將像は無くなること、宋代の墓前の文臣像は頭に進賢冠を被っているが、明代以降はすべて烏紗帽となること、この半成品の石虎は力強く小型で、明代の背が高く大きな石虎とは形態上の區別があることから、「これらの石彫は、宋代の石彫、ならびに北宋の風格を十分に表しており、北宋晩期から南宋初期の作品とすべきである。この発見以前、我々は一般に東錢湖の石刻を南宋石刻と見なしていたが、現在は、その歴史はさらに過去に遡るものであることが確定した」という。発見された石刻は、すべて未完成であった。「石彫のうち、石虎はおおむね完成していたが、亀趺は粗く輪郭が出来上がっているだけで、文臣の素材は輪郭を仕上げた後、すでに頭部から表面を彫り進み細かい彫刻を行っている。武將の素材の一つは輪郭を仕上げた後、すでに頭部から上半身へと表面を彫り進んでいるが細かい彫刻はまだ行っていない。武將の素材の二つ目は輪郭を仕上げた後、すでに顔の部分から表面を彫り進み始めた後、細かい彫刻に入っている」。なぜ未完成のまま放棄されたかについては、「たとえば、石虎の口、亀趺の背部の角、文臣の顔の部分などは、すべてにあきらかに割れ目が入っている」。「これは、石質が適切ではないためで、けっして石工の技術が原因となったものではない」。「粗悪品が出るところは、基本的にすべて岩石の本来の割れ目の場所にある。石工が彫刻を始めたばかりの素材の段階では、これらの割れ目は肉眼では確認が難しく、細部の加工に入った段階で振動によって自然に割れ目が入り粗悪品となるのである」とする。実は、これら3つの半成品石刻の石材となった小溪石は、方岩組地層中の泥質粉砂岩、砂岩、砂礫岩中から採掘されるもので、顕著な特徴として層理を有する。したがって、薄く水平に剥ぎ取ることが可能で、建築資材としては優れるが、石碑、石造物などの装飾的彫刻には不向きである。こうしたことから、小溪石は、北宋から南宋初期にか

けては石刻用の石材として使用されたが、やがて、同じく方岩組地層中から産出される均質で層理のない凝灰岩「梅園石」に取って代わられたのであろう。このことから、寧波地域における梅園石の石造物への使用は南宋以降のことであることが明確になる。したがって、梅園石と同一石材と認定可能な薩摩塔石材も、その利用は南宋以降と推定されるのである。

2011年6月6日に、平成23-25年度科研費「西日本における中世石造物の成立と地域的展開—石材と形態・様式に着目して—」（代表：市村高男・高知大学）の一環として、山川均氏（大和郡山市教育委員会）の仲介により、東大寺石獅子の調査が行われた。石獅子への接触は不可であったが、剥落した岩片を手にとって観察することは許可された。岩片のルーペ観察を行った大木公彦によれば、基質は坊津薩摩塔と同じであるが、やや異質岩片が多く、粒子も薩摩塔と比べて粗い印象があるとのことであった。また、山川均2010に指摘されるように、石獅子の東方像は大きく西に傾いている。これは意匠的問題ではなく、素材とした石材自体に問題のあったことが推定される。したがって、中国における白亜紀方岩組地層に由来する石材利用の状況が、小溪石から梅園石へと石造物作成に適したものへと移行していった過程を考えた場合、梅園石と認定可能な粒子の細かい薩摩塔石材は、東大寺石獅子石材よりも時期的に遅れるという可能性が考えられる。

現在の薩摩塔の年代研究における現状をまとめると、石材という観点からは、中国における白亜紀方岩組地層に由来する石材利用の状況から、その上限が南宋初期で、1127年以降となり、日本に浙江石材の搬入された事が明確な1196年及び1220年以前が議論の一つの出発点となる。また、薩摩塔石材が石造物制作に適した良質の石材であることを考慮すると、東大寺石獅子よりも時期的に遅れる可能性を指摘できる。首羅山薩摩塔については、共伴遺物の宋風獅子についての様式論的検討から13世紀半ばが示唆され、首羅山遺跡そのものの時代認定から13世紀と推定がなされている。さらに、慎重な扱いが必要ではあるが、紀年銘資料としての志々伎神社中宮の薩摩塔から「元亨三年」（1323）という年代が推定されている。

3 名称と性格

高津孝・橋口亘2008は、南宋の紀年銘石塔靈鷲寺塔（1216-18年）に対して、薩摩塔との様式的類似を指摘し、高津孝・橋口亘・大木公彦2010では、薩摩塔の造形について検討を行い、薩摩塔、類薩摩塔（沖の宮塔）を包摂する上位グループとして「靈鷲寺式石塔」（「屋根（笠）・仏龕・須弥壇（須弥座）の組み合わせを基本構造とするタイプの石塔」のグループ）を設定した。靈鷲寺塔は、浙江省麗水市に現存する南宋の紀年銘を有する石塔で、中国石材を使用した中国系石塔としての薩摩塔を考察する際に、極めて重要な意味を持つ。靈鷲寺塔四基は、現在は麗水市中心部の万象山公園の西南麓に設置されているが、もともとは東の郊外の靈鷲寺門前に設置されており、1950年代末にダム建設の計画が有ったことから、雲和県城の郊外の前溪山

上に移され、1980年になって、現在の場所に移された¹²。

ここでは、『括蒼金石志』巻七に収められた靈鷲寺塔銘文「靈鷲山石塔款識」について解釈を施し、その性格について考察を加える¹³。

靈鷲山石塔款識一（割注）凡七行、行七字、正書、徑寸。

都□□前□本院／傳度比[印]吳□表／弟起塔一座福報／四□□□三□□／且宋嘉定九年歲／次丙子正月十七／日謹題匠者□□

靈鷲山石塔款識二（割注）凡九行、行九字、正書、徑寸。

當院徒弟比[印][師倬]施長／財建塔一座祈福追怙／先考汝南應六承事先／妣 君吳氏同生淨界／求脫輪廻四恩普報三／有齊資一切冤親咸成／佛道時太歲丙子嘉定／九年四月十五日謹題／ 石匠葉成

靈鷲山石塔款識三（割注）凡八行、行七八字不等、正書、徑寸。

當院徒弟住持東山／多福院比[印][師倬]抽施／長財建造／七佛寶塔一所祈／福報答四恩利資三／有嘉定九年歲次丙／子十一月朔日謹題／ 匠者陳喜

靈鷲山石塔款識四（割注）凡七行、行字不等、正書、徑寸。

處州府郭内往／印庵比[印]□□□施財／命工鑄造寶塔一座祈／福乞薦先考二承郎趙公／先妣二安人陳氏遠年□界／仍報四恩三有者／時嘉定十一年戊寅歲□□造

右靈鷲山石塔銘共四座建於嘉定年間比[印]所／爲辭皆一律案六朝人造像或銅或石多有唐時／建石幢刻尊勝陀羅尼經徧天下佛寺此起石塔／同一義也文字惡劣降而愈下殊不足取以其宋／刻而錄存之

靈鷲山石塔款識一

（割注）凡そ七行、行七字、正書（楷書）、徑寸（一寸四方）なり。

都□□前□本院の傳度比邱吳□の表弟、塔一座を起て、福報四□□□三□□且、宋の嘉定九年（1216）歳次丙子、正月十七日、謹みて題す。匠者□□

靈鷲山石塔款識二

（割注）凡そ九行、行九字、正書、徑寸なり。

當院の徒弟比邱師倬、長財を施し、塔一座を建て、祈福追怙す。先考汝南應六承事、先妣君吳氏、同じく淨界に生まれ、輪廻を脱せんことを求む。四恩（父母恩、衆生恩、国王恩、三宝恩）に普く報ひ、三有（三界の生死）に齊しく資し、一切の冤親（かたきと肉親）、咸（みな）佛道を成ぜん。時に太歲丙子、嘉定九年（1216）四月十五日、謹みて題す。石匠葉成。

靈鷲山石塔款識三

（割注）凡そ八行、行七八字にして不等、正書、徑寸なり。

當院の徒弟にして、東山多福院に住持せる比邱師倬、長財を抽施し、七佛寶塔一所を建造して、福を祈り四恩に報答し三有に利資す。嘉定九年（1216）歳次丙子、十一月朔日、謹みて題す。匠者陳喜。

靈鷲山石塔款識四

(割注) 凡そ七行、行字は不等、正書、徑寸なり。

處州府郭内の往印庵比邱□□□、財を施し、工に命じ、寶塔一座を鑄造し、福を祈り、先考二承郎趙公、先妣二安人陳氏に、遠年□界を薦(すす)め、仍(なほ)四恩三有に報ひんことを乞ふ者なり。時に嘉定十一年(1218)戊寅歲。□□造す。

右の靈鷲山石塔銘は、共に四座にして、嘉定年間に建つ。比邱爲す所の辭は、皆一律なり。案ずるに、六朝人の造像は、或いは銅或いは石なり。唐時、石幢を建て、尊勝陀羅尼經を刻し、天下の佛寺に徧くすること有ること多し。此れ石塔を起つと、同一義なり。文字は惡劣にして、降りて愈いよ下にして、殊に取るに足らず。其の宋刻なるを以て、之を録存す。

4つの塔は、それぞれ別個の人物(僧侶およびその親戚)が、先祖供養やその他の目的で建てたもので、1号は嘉定九年(1216)1月17日、2号は嘉定9年(1216)4月15日、3号は嘉定9年(1216)11月朔日、4号は嘉定11年(1218)の紀年銘を有する。当時、これらの塔は、「塔」「七佛寶塔」「寶塔」と呼ばれていたことがわかる¹⁴。最後の一文は、編者である清・李遇孫のコメントである。文字は拙劣であるが、貴重な宋代の資料ということで収録したことを言う。李遇孫の解釈では、このような塔は唐代に各地の仏教寺院に設置された尊勝陀羅尼經を刻する石幢と同様の意義を有するとする。

4 薩摩塔認定をめぐる問題点

破損している作例の薩摩塔としての認定の困難さについては、すでに井形進氏も述べているとおり(井形進2010)である。現在、表に挙げた諸資料は、我々も含めた研究者間で、薩摩塔(あるいは薩摩塔類)として扱われることが多いが、その多くは、厳密に言えば、薩摩塔の可能性を有する、もしくは薩摩塔の可能性が高い石塔にすぎない。

例えば、大村市現存の薩摩塔は、大石一久氏による発見以来、我々を含め複数の研究者が薩摩塔の部材として扱っているが、須弥壇部分の部材のみ確認されているという意味では、福岡市興徳寺の大応国師供養塔(橋口亘・高津孝・大木公彦2011)などと条件は同じである。先行研究を踏まえて筆者らが示した薩摩塔の特徴(橋口亘・高津孝・大木公彦2010)と照合する上で、必要な部材を欠く多くの物件については、慎重を期せば、薩摩塔と断定できず、他型式の石塔である可能性も指摘できるということになる。

こうした中、井形進氏は首羅山遺跡の薩摩塔を「薩摩塔の代表作」としている(井形進2010)。しかし、鹿児島県などの残存状況が良好な薩摩塔の事例をはじめとする他資料が存在しなければ、単体では屋根以下の推定復元すら困難な(自らでは体を成し得ない)首羅山遺跡の薩摩塔は、井形氏が主張するような「薩摩塔の代表作」とは認めがたい。現在、薩摩塔の頂

部（相輪又は宝珠などが載る可能性が指摘されている）を除き、屋根以下の大部分が残存する資料が、鹿児島県をはじめとして数例存在し（鹿児島県内では坊津輝津館の薩摩塔、川辺水元神社の薩摩塔、川辺神殿の薩摩塔の3例）、これらの資料こそが薩摩塔の造形を見る上で代表的な作例として位置付けられるべきであろう。

一方、前述した、平戸市下寺観音堂跡にある写真1の石塔部材Aは、仏像を刻出した壺形塔身部（龕部）の上に屋根を載せるという薩摩塔の造形と共通する特徴が見られるが、塔身部の平面プランが隅丸方形で、かつその前後面に2体の仏像を刻出するという点で、イレギュラーな存在であると言える。注目すべきは、造形の異質さと呼応するかのように、当該資料の石材が、薩摩塔に共通する「梅園石と認定可能な石材」とは異質であるという点である。

こうして見ると、「梅園石と認定可能な石材」が、薩摩塔の持つ重要な属性の一つであることが、あらためてうかがわれる。もちろん「梅園石と認定可能な石材」で製作された石塔は薩摩塔だけではない¹⁵ことから、「梅園石と認定可能な石材」で造られた石塔が直ちに薩摩塔であるとは限らないが、薩摩塔の可能性を認定する上で、一定程度有効な指標になると思われる。特に、小片となった資料について、薩摩塔の部材の可能性があるか否かを判断するような場面で有力であろう。

5 薩摩国河辺郡における薩摩塔の分布とその背景

坊津輝津館現存の薩摩塔を含む旧河辺郡内に現存する薩摩塔が、同郡に勢力を持った川辺氏や千竈氏、同郡の硫黄島で産出する対外輸出品であった硫黄と関連する可能性については、すでに2010年に高津孝・橋口亘によって指摘されている（高津孝・橋口亘2010）。

その後、桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011は、川辺と坊津に現存する薩摩塔について述べ、千竈氏や硫黄などとの関連で、高津孝・橋口亘2010と類似した指摘を行っているが、一方、今日の川辺町地域が良質の杉材の産地であることを根拠に、中世の川辺町地域が「倭板」の産地であった可能性があるとしている。しかし、現在川辺町地域の杉林の多くは20世紀以後の植林である。新地浩一郎氏（南九州市教育委員会）のご教示によれば、地元の古老からの聞き取りでは、もともと川辺町地域には杉よりもむしろ松が多かったという。よって、仮に川辺町地域が中世に中国へ輸出された倭板の産地であったならば、材料は杉よりも松の可能性が高いと思われるが、いずれにしても、中世の川辺町地域の木材が中国へ輸出されたことを示す史料が皆無な状態で、今日の川辺町地域が杉材の産地であることのみを根拠に、川辺町地域が中世に中国へ輸出された倭板の産地であったということはできない。産出場所が一定程度限定される硫黄などと比較して、産出地域が広範囲にわたる木材は、九州地域のいたるところで産出する。中世の川辺町地域で木材が産出したこと自体は想像に難くないが、本当に当時の輸出木材の需要が他産地では満たされず、九州南端の川辺町地域の木材をわざわざ運ばなければならないほ

どだったのか、中世の川辺町地域の木材が運輸コストを加味しても他産地との競争に勝ち中国へ輸出されるほどの競争力を持っていたのか、など疑問は尽きない。

また、桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011は、「千竈時家讓状」で讓与の対象となった地域について、旧加世田市域を含むとする。五味克夫編1968をはじめとする多くの先行研究によって、筆者らは当該讓状に登場する讓与対象域に旧加世田市域は含まれないと理解している。

坊津と川辺という両地域、いわゆる旧河辺郡域における薩摩塔の分布は、同郡内の硫黄島で産出した硫黄の対外輸出、硫黄交易と少なからず関わっているものと考えて良いのではないだろうか。坊津・川辺など旧河辺郡の薩摩半島側の地域と硫黄島との緊密な関係（橋口亘2010）からもそれはうなずけよう。最近、硫黄島から宋代の中国陶磁が発見され、有力な搬入ルートとして北部九州経由のルートで硫黄島へ中国陶磁がもたらされた可能性（他のルートで搬入された可能性を残す）が指摘されており（橋口亘・若松重弘2011ab）、硫黄島と同じ旧河辺郡内にもたらされた薩摩塔も同様のルートで搬入された可能性が高い。また、1262年に明州から日本へ帰国した無関玄悟は、「薩摩河野部」に2年間滞在している（『大明国師行状』、榎木渉2010）。このことから、北部九州経由ではないルートによる薩摩塔の搬入の可能性もうかがえる。したがって、同郡に勢力を持った千竈氏ら在地領主や寺院などの地域権力が、物流に携わる商人との関わりの中で、薩摩塔などの流通・交易に関与したことは想像に難くないと考えられる。

引用・主要参考文献一覧

- 天本孝志1977 『筑前宇美の神々』（葦書房、1977年12月）
安藤 保・川崎兼孝1998 『鹿児島郡』（『鹿児島県の地名』日本歴史地名大系47、平凡社、1998年）
井形進2008a 「白山遺跡の薩摩塔」（『九歴だより』No.27、九州歴史資料館、2008年4月）
井形進2008b 「首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔」（久山町白山遺跡調査指導委員会・久山町教育委員会編『首羅山遺跡－福岡平野周縁の山岳寺院－』久山町教育委員会、2008年12月）
井形進2010 「薩摩塔について」（久山町教育委員会『首羅山遺跡 発掘調査概要報告書』久山町文化財調査報告第15集、2010年3月）
井形進2011 「薩摩塔研究概観—新資料の紹介と共に—」（九州古文化研究会『古文化談叢』第65集（4）、2011年7月）
上田雄1976 「碇石についての研究調査報告」（『海事史研究』27、1976年10月）
江上智恵2011 「首羅山遺跡とその周辺」（九州古文化研究会『古文化談叢』第65集（4）、2011年7月）
榎木渉2010 「東シナ海の宋海商」（『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』、吉川弘文館、2010年）
江平望1976 「得宗領薩摩河辺郡について」（『鹿児島中世史研究会報』36号 鹿児島中世史研究会、1976年）
江平望2009 「鎌倉・南北朝時代の河辺郡・知覧院・穎娃郡」（『南九州市 薩南文化』創刊号 南九州市立図書館、2009年）
大石一久1998 「中世の石造美術」（『平戸市史 民俗編』、長崎県平戸市、1998年12月）
大石一久1999 『石が語る中世の社会 長崎県の中世・石造美術』（ろうきんブックレット9、長崎県労働金庫、1999年1月）
大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009 「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」（鹿児島大学理学部『鹿児島大学理学部紀要』42、2009年）

- 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘・内村公大2010 「日本における薩摩塔・碇石の石材と中国寧波産石材の岩石学的特徴に関する一考察」(鹿児島大学『理学部紀要』No.43, pp.1-15、2010年)
- 小川光彦2008 「海域アジアの碇石航路誌」(四日市康博編著『モノから見た海域アジア史』九州大学出版会、2008年3月)
- 落合清茂2008 「岩石の命名：凝灰岩について—「東大寺石獅子の石材」へのコメント」(中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年8月9日)
- 小田雄三1993 「嘉元四年千竈時家処分状について—得宗・得宗被官・南島諸島—」(『年報 中世史研究』18号、中世史研究会、1993年)
- 小葉田淳1933 「中世に於ける硫黄の外國貿易と其産出」(『經濟史研究』第43號、日本經濟史研究所、1933年)
- 鹿児島県1939 『鹿児島縣史』第一卷(鹿児島縣、1939年)
- 川辺町役場1961 「これも貴重な文化財—神殿虎御前の墓—」(『広報かわなべ』1月号[第39号]、川辺町役場、1961年1月)
- 金指正三1968 「江戸時代の海難について」(『海事史研究』10、1968年4月)
- 黒田清光1974 「解説 南九州の石塔について」(『川内市史 石塔編』、鹿児島県川内市、1974年)
- 黄宗義2005 『黄宗義全集』(沈善洪主編、浙江古籍出版社、2005年1月)
- 五味克夫編1968 「長島 千竈文書」(『鹿児島県史料拾遺』(X)、「鹿児島県史料拾遺」刊行会、1968年)
- 五味克夫1995 「中世の海の道—鎌倉・南北朝時代の海の道—」(『海の道』歴史の道調査報告書第三集(鹿児島県教育委員会)、徳田屋書店、1995年)
- 齋藤彦松1958 『造形史学手記』第十九冊(南九州市教育委員会所蔵)
- 静永健2009 「阿弥陀經石の航路」(東アジア地域間交流研究会編『から船往来—日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』(中国書店、2009年6月)
- 斯波義信1968 『宋代商業史研究』(風間書房、1968年2月)
- 島田寅次郎1933 「筑前に於ける鎌倉時代の遺蹟遺物について」(福岡縣『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第8冊史蹟之部、1933年3月)
- Suzuki, K., Karakida, Y. and Kamada, Y. (2000): Provenance of granitic anchor stones recovered from the Takashima submerged site: an approach using the CHIME method for dating of zircons. Proc. Japan Acad., 76, 139-144.
- 鈴木和博・輿語節生・加藤文典・渡辺誠2000 「博多湾、志賀島で発見された玄武岩質碇石の産地」(『名古屋大学博物館報告』16、2000年)
- 浙江省郵鼎地方志編委會1996 『郵鼎志』(中華書局、1996年9月)
- 高津孝・橋口亘2008 「薩摩塔小考」(『南日本文化財研究』No.7、『南日本文化財研究』刊行会、2008年5月)
- 高津孝・橋口亘2010 「謎の石塔「薩摩塔」」(『順風往来—薩摩をめぐる東アジア海域交流史—』南さつま市坊津歴史資料センター輝津館、2010年9月)
- 高津孝・橋口亘・大木公彦2010 「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」(『鹿大史学』57、2010年2月)
- 高津孝・橋口亘・松本信光・大木公彦2010 「南西諸島現存碇石の産地についての一考察」(鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』72、2010年7月)
- 多田隈豊秋1975 『九州の石塔』上巻(西日本文化協会、1975年)
- 永山修一1993 「キカイガシマ・イオウガシマ考」(『日本律令制論集 下』、吉川弘文館、1993年)
- 永山修一2008 「文献から見たキカイガシマ」(『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』、高志書院、2008年)
- 寧波市地方志編纂委員会1995 『寧波市史』(中華書局、1995年10月)
- 橋口亘2010 「坊津と硫黄島・硫黄移輸出に関する一考察」(『南日本文化財研究』No.9、『南日本文化財研究』刊行会、2010年12月)
- 橋口亘・高津孝・大木公彦2011 「大応国師供養塔(福岡市興徳寺) 四天王像彫出部材の発見と薩摩塔」(『南日本文化財研究』No.12、『南日本文化財研究』刊行会、2011年7月)
- 橋口亘・若松重弘2011a 「鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」(『南日本文化財研究』No.10、『南日本文化財研究』刊行会、2011年3月)
- 橋口亘・若松重弘2011b 「(続) 鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」(『南日本文化財研究』No.11、『南日本文化財研究』刊行会、2011年5月)
- 服部仁2008 「東大寺石獅子の石材について」(中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年8月9日)
- 久山町教育委員会2010 「薩摩塔展」パンフレット(久山町教育委員会、2010年9月15日)
- 毎日新聞社1961 「薩摩塔の名で町文化財に 川辺町の三つの特殊仏塔」(『毎日新聞』鹿児島版、1961年11月20日朝刊)
- 麻承照・謝国旗2003 『東銭湖石刻』(中国文聯出版社、2003年9月)

- 松尾尚哉2010 「宇美町所在の薩摩塔について」(福岡大学考古学研究室『還暦、還暦? 還暦! —武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集』2010年3月)
- 松田朝由2008 「鹿児島県の薩摩塔」(『南日本文化財研究』No.7、『南日本文化財研究』刊行会、2008年5月)
- 村井章介1997 「中世国家の境界と琉球・蝦夷」(『境界の日本史』山川出版社、1997年)
- 村井章介1999 「鬼界が島考—中世国家の西境—」(『別府大学アジア歴史文化研究所報』第17号、別府大学アジア歴史文化研究所、1999年)
- 村井章介2006 『境界をまたぐ人びと』(日本史リブレット28 山川出版社、2006年)
- 村井章介2008 「中世日本と古琉球のはざま」(『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』、高志書院、2008年)
- 村上博優1998a 『江南雲遊求法地資料』(上下)(龍洞院、1998年3月)
- 村上博優1998b 『補稿 日中文化交往歴史年表』(龍洞院、1998年3月)
- 桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011 「九州発見中国製石塔の基礎的研究—所謂「薩摩塔」と梅園石 製石塔について—」(『福岡大学考古資料集 4』福岡大学考古学研究室研究調査報告第10冊、福岡大学人文学部考古学研究室、2011年3月)
- 山内晋次2009 『日宋貿易と「硫黄の道」』(日本史リブレット75、山川出版社、2009年)
- 吉田久昭2008 「東大寺の石獅子の石材と近畿地方の類似岩石」(中日石造物研究会主催「東大寺石獅子をめぐる研究集会」レジュメ集、2008年8月9日)
- 楊古城・龔国榮2006 『南宋石彫』(寧波出版社、2006年12月)

「志自岐沖之宮石鉢之圖 / 沖島全圖 平戸藩蔵」(文政五年(1822) 壬午十月、松浦史料博物館所蔵)

「東大寺造立供養記」(『群書類従』第24輯釈家部、1960年4月訂正第三版)

「靈鷲山石塔歎識」(清・李遇孫撰『括蒼金石志』卷7、『石刻史料新編』(新文豊出版公司、1977年) 第一輯地方類所収)

- 1 明光寺は、寺伝によれば、永徳年間(1381-84)創建の古刹であるが、もともと博多の東町上にあったものを、明治43年(1910)吉塚に移転した(『福岡県の地名』平凡社、2004年)。したがって、この部材を明光寺固有のものとするのは難しい。
- 2 「福岡市堅粕町慶學院の墓塔」として島田寅次郎1933年に写真及び記述がある(写真3参照)。仏龕及び台座のみの残存であるが、仏龕部材の高さは65cmを越えるものである。たとえば、水元神社薩摩塔の比率を当てはめるならば、元来は2.5メートルを越える巨大な石塔であったと推定される。「宮崎宮造営材木目録」(『宮崎宮史料』宮崎宮、1970年)には、建長5年(1253)の年号を有する記述に「堅槽」の「領主」として、「博多綱首張興、御分通事」の名が見えており、本石塔については、博多綱首、宋代の中国商人との関連を今後検討すべきであろう。林文理「博多綱首の歴史的位置」(『古代中世の社会と国家』清文堂出版、1998年)参照。
- 3 桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011。
- 4 久家孝史氏(松浦史料博物館研究管理主任)によって新しく発見されたものである。
- 5 井形進2010。
- 6 調査にあたって、鷲見昌尚(吉野ヶ里町教育委員会社会教育課文化財保護係長)、河野竜介(吉野ヶ里町教育委員会社会教育課文化財調査係長)西野元勝(佐賀県教育庁社会教育文化財課)各氏の協力を賜った。
- 7 西野元勝氏によれば、高瀬哲朗(石垣技術研究機構代表)氏によって発見されたという。
- 8 「東大寺造立供養記」(『群書類従』第24輯釈家部、1960年4月訂正第三版)参照。
- 9 2011年11月調査において、志々伎神社中宮薩摩塔の陰刻銘を詳しく調査する機会を得たが、剥落によって形成されたと推定される凹部に「志」字の上部が刻まれており、後刻の可能性も考慮する必要があるのではないかと考えられる。
- 10 http://daily.cnnb.com.cn/dnsb/html/2010-04/08/node_176.htm
- 11 この記事には、「記者：李臻 通訳員：謝國旗」とある。謝國旗氏は、『東銭湖石刻』(共著、中国文聯出版社、2003年9月)という著書もあり、文中の専門家は謝氏を指すと考えられる。
- 12 呉志標2009。
- 13 「靈鷲山石塔歎識」(清・李遇孫撰『括蒼金石志』卷7、『石刻史料新編』(新文豊出版公司、1977年) 第一輯地方類所収)。

- 14 井形進2011で示された薩摩塔紀年銘では、1行目を「大寶□」と判読し、塔名かと推定している。13世紀中国での類似塔に対する呼称「寶塔」は、今後検討すべき材料となる可能性がある。
- 15 桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011で紹介された篠栗乙犬の層塔部材は、11月調査で、肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材であると判明した。ちなみに、同論文で「寧波梅園石製の中国製石塔である可能性が高い」とする太宰府安養院址伝武藤資頼墓は、7月調査で、肉眼観察の結果、梅園石と認定可能な石材ではないと判明している。

追記：

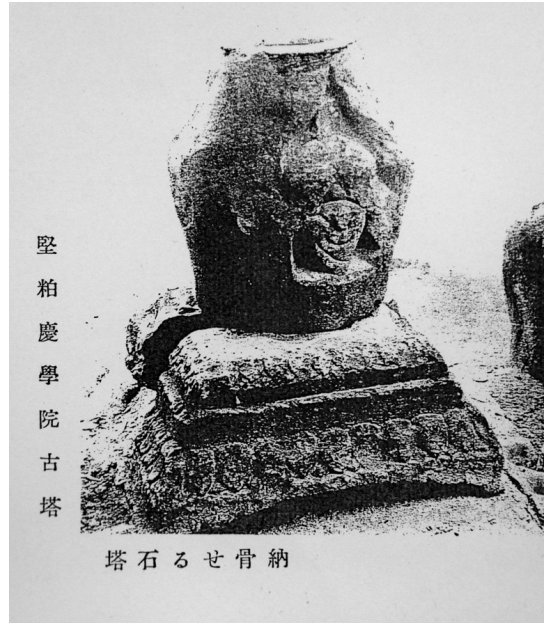
筆者らが行った薩摩塔からの石材サンプル採取について、井形進2011では「文化財をあつかう手法に違和感」と「破壊分析が抵抗なく行われる風潮を導かないか危惧」が表明されているが、この件について、筆者らの見解を少し述べておきたい。薩摩塔からサンプル採取が行われたことについて、井形論文では「違和感」や「危惧」が表明されているが、筆者らは、文化財の調査研究にあたっては、文化財のむやみな破壊は許されないが、場合に応じて一定程度の破壊もあり得ることを認める立場である。したがって、文化財の学術調査研究を目的とした発掘の存在なども容認する立場である。筆者らにとっては、石塔からのサンプルの採取も、出土炭化物からのサンプル採取も、山岳寺院遺跡の基壇の一部を削り断ち割ってその構造を調査することも、未来の調査技術では解析できる重要な情報が詰まっているかもしれない調査区の土を棄てることも、等しく文化財の一部破壊行為であると考えている。井形論文の論法では、たとえほんの一部分の破壊であろうと、現代の発掘は容認され得ないものとなる。にもかかわらず、井形氏が調査指導委員会の委員として調査指導を行っている首羅山遺跡（福岡県の山岳寺院遺跡）では、基壇の一部削り断ち割るなど、文化財の一部を削って発掘調査が実施されている。こうした現状と、文化財からのサンプル採取に違和感や危惧を表明している井形論文の主張との間に矛盾がある。井形論文で示された主張が、公平に貫き通されるのか注視している。



写真1 平戸市田平町の下寺観音堂跡現存の石塔



写真2 福岡市博多区堅粕の馬頭観音堂現存の薩摩塔



堅
粕
慶
學
院
古
塔

塔石るせ骨納

写真3 堅粕慶學院古塔

(図版引用：島田寅次郎1933年「筑前に於ける鎌倉時代の遺蹟遺物について」『史蹟名勝天然記念物調査報告書第八輯 史蹟之部』福岡縣より)



写真4 平戸市鏡川町庚申講のお堂前現存の薩摩塔
(写真中央)



写真5 平戸市野子町宮ノ浦志々伎神社沖の宮現存の宋風獅子

薩摩塔類（薩摩塔・類薩摩塔）分布簡表

	現存地	基調	備考・出典等
	鹿児島県		
1	坊津歴史資料センター輝津館 (南さつま市坊津町坊)	四角	(齋藤彦松1958)
2	水元神社 (南九州市市川辺町清水)	六角	(毎日新聞社1961)
3	虎御前の墓 (南九州市市川辺町神殿)	四角	(川辺町役場1961)
4	ミュージアム知覧 (南九州市知覧町郡)	四角	(毎日新聞社1961)
5	沢家墓地 (霧島市隼人町神宮五丁目)	六角	(黒田清光1974)
	長崎県		
6	志々伎神社沖の宮 (平戸市野子町 宮ノ浦)	六角	(多田隈豊秋1975) 文政5(1822)年「志自伎沖之宮石鉢圖」
7	志々伎神社中宮 (平戸市野子町)	六角	(大石一久1998)
8	志々伎神社中宮 (平戸市野子町)	四角	(大石一久1998)
9	白山比賣神社 (平戸市主師町 安満岳山頂付近)	四角	(大石一久1998)
10	白山比賣神社 (平戸市主師町 安満岳山頂付近)	四角	(高津孝・橋口亘・大木公彦2010)
11	館山是興寺跡 (平戸市鏡川町)	四角	(大石一久1998)
12	桜溪書院跡 (平戸市戸石川町)	四角	(高津孝・橋口亘・大木公彦2010)
13	里田原歴史民俗資料館 (平戸市田平町里免)	四角	(大石一久1998)
14	里田原歴史民俗資料館 (平戸市田平町里免)	四角	(大石一久1998)
15	龍福寺跡 (大村市立福寺町)	六角	(大石一久1998)
16	下寺観音堂跡 (平戸市田平町下寺免)	不明	(大石一久情報)
17	下寺観音堂跡 (平戸市田平町下寺免)	四角	(大石一久情報)
18	庚申講のお堂前 (平戸市戸鏡川町)	四角	(久家孝史情報)
19	誓願寺 (平戸市戸石川町410)	四角	(桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011)
	佐賀県		
20	黒髪山西光密寺 (武雄市山内町大字宮野)	六角	(大石一久1998)
21	妙覚寺境内 (多久市南多久町大字下多久)	四角	(高津孝・橋口亘・大木公彦2010)
22	妙覚寺境内 (多久市南多久町大字下多久)	四角	(高津孝・橋口亘・大木公彦2010)
23	背振山霊仙寺跡出土 (神埼郡吉野ヶ里町)	四角	(井形進2010b)
24	背振山霊仙寺跡出土 (神埼郡吉野ヶ里町)	四角	(久山町教育委員会2010)
25	仁比山護国寺地藏院 (神埼市神埼町の)	不明	(桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理2011)
	福岡県		
26	首羅山遺跡 (久山町大字久原)	四角	(井形進2008a)
27	首羅山遺跡 (久山町大字久原)	四角	(井形進2008a)
28	太宰府市個人宅 (太宰府市)	四角	(井形進2008b)
29	宇美町個人宅 (糟屋郡宇美町)	四角	(松尾尚哉2010)
30	火炎塚 (福岡市東区志賀島)	四角	(井形進2010b)
31	弓の馬場・茶山会館 (福岡市城南区茶山)	六角	(井形進2010b)
32	所在不明 (福岡市城南区田島)	四角	(井形進2010b)
33	明光寺 (福岡市博多区吉塚)	六角	(久山町教育委員会2010)
34	馬頭観音堂 (福岡市博多区堅粕)	四角	(井形進2008b)
35	興徳寺・大応国師供養塔 (福岡市西区姪の浜)	六角	(橋口亘・高津孝・大木公彦2011)

※本表は、高津孝・橋口亘・大木公彦2010の「薩摩塔類（薩摩塔・類薩摩塔）分布表」に基づき、内容を節略し、件数を増補したものである。また、本表には、残存状況などから薩摩塔と断定できないものの、薩摩塔の可能性を有する資料を含む。

※薩摩塔類には一石造り型のほか寄石造り型のがみられ、残存状況によっては個体数の把握が困難なケースも多く、本表に示した薩摩塔類の個体数は、今後増加する可能性がある。

※上記4県の記載順は、発見された時期の早い県順とした。

※1、15は、岩石学的分析により、寧波産石材梅園石と同一石材であると認定された。2-14、16-31、33-35及び共伴の宋風獅子(6,13,14,26,27)は、肉眼およびルーペ観察により、坊津薩摩塔と同一石材と認定可能とした。

※29は、「宝篋印塔」として天本孝志1977に記述がある。34は「福岡市堅粕町慶學院の墓塔」として島田寅次郎1933に記述がある。